



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 福居誠二先生の思い出

著者	田辺 欧
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	9
号	1
ページ	77-78
発行年	2017-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027383">http://hdl.handle.net/10236/00027383</a>

## 福居誠二先生の思い出

大阪大学言語文化研究科教授 田 辺 欧

梅雨も半ばに入り、いよいよ夏の到来を思わせる蒸し暑い日が続くようになった6月下旬のこと、福居先生からお電話をいただきました。「あのう突然お願いがあるのですが… 僕、来年退職するのですけれど、田辺さんよかったら僕に関して思い出すこと何でもいいので書いてくれませんかあ…」とお声がかかり、このたびのご退職記念号に寄稿させていただくことになりました。

福居先生は私にデンマーク語発音の難解さと同時にその面白さに気づかせてくださいました。また先生を通して北欧諸国そして北欧人の民主的側面についても多くのことを学びました。今回の寄稿の話を書いたとき先生は、「僕と田辺さんは別に師と弟子という関係じゃないですから福居さんって書いてね。大人と大人の関係です。僕はあなたの先生ではありません！ あなたは私の子供でもありません！」と。そのとき私は「ああ福居先生、やっぱり変わってらっしゃらないなあ」と感じました。先生は終始一貫して「権威」というものに対して抗う姿勢をとってこられたように思います。私は先生の学生時代を存じ上げませんが、ちょうど先生が学生だった頃は学生運動の最盛期。きっと先生は若い頃から世の中のさまざまな「権威」と闘ってこられたのでしょう。私たち学生に「相手が偉かろうが、歳上であろうが、おかしいと思ったらはっきり自分の意見を言わんとあかんよ。もうあなた方は立派な大人なんだから」とよく言っておられたのを思い出します。ですから私も一人の大人としてははっきりとお返事しました。「ええ、たしかに私は先生の弟子ではありません。もちろん子供でもありません。でも、先生には違いありません。先生は私にデンマーク語を教えてくださいました。どんな立場であれ、教える者、学ぶ者の関係は変わりません」と。ですから私は福居誠二先生を、「先生」と呼ばせていただきます。先生、よろしいですよ。

さて前置きが長くなりましたが、福居先生とのおつきあいは今から30年以上前に遡ります。1984年、私が大阪外国語大学・デンマーク語学科3年生のときに履修した専攻語の授業「言語音声研究」が、先生との最初の出会でした。先生の第一印象は「オバケのQ太郎に登場する“ラーメンの小池さん”」（失礼!）でした。天然パーマでちっとも先生っぽくない風貌、クールだけれどまったく気取りのない喋り方。

福居先生の授業はデンマーク語の発音練習と聞き取りが中心でしたが、私のなかで一番印象に残っているのはラジオの天気予報を聞いて、気温や気圧などの数字と天候を言い当てる練習問題でした。昔から天気予報に余念のない私はこの練習が大好きで、デンマーク語の発音が聞き取れなくても必死になってデンマーク語の気象用語を辞書で調べて覚ええました。ただ数は苦手で、何回聞いても早口でまくしたてる数字が聞き取れず難儀しました。今だったら簡単にネットで天気予報をキャッチできるのでおおよその見当がつくのですが、当時は外国の天気を知る手段は新聞か短波ラジオに限られていたのです。

私は音楽が大好きですが、耳はめっぽう悪く、デンマークの難解な発音を未だに完全に習得できないままのテイタラクです。一方、福居先生は1985年にスウェーデン語学科が新設されたのを機に、スウェーデン語学科に所属する学生に対しても「言語音声研究」の授業を受け持たれることになり、あっという間にスウェーデン語をマスターされました。そしてその後、専攻実習科目の「スウェーデン語」教育にも大きく貢献されることになります。ちなみにデンマーク語とスウェーデン語は兄弟言語でありながら、音声的にはずいぶん違います。そう言えば、1985年からしばらくのあいだ、先生とご一緒にスウェーデン語会話教室に通ったことがありました。後に大阪外国語大学でスウェーデン語の外国人教師として長年お世話になったスウェーデン人のアストリッド・ヴィヒマン先生のところへ。ヴィヒマン先生は当時JR 芦屋駅のすぐそばの小児科の離れを借りて、ドイツ人である夫君のユルゲン・ヴィヒマン先生とともにドイ

ツ語・スウェーデン語会話教室を開いておられました。私は1年ほどでその会話教室をやめました。先生はスウェーデン語をマスターされた後も随分長いことスウェーデン語会話上級クラスに通っておられたと聞いております。また先生は大阪外国語大学の留学生別科（後の留学生日本語センター、大阪大学日本語日本文化教育センター）で日本語教師も25年近く務められました。聖和大学、関西学院大学では英語の授業をご担当だったのですから、先生の語学の才能はとても他人に真似できるものではありません。

ただひとつだけ、私にも先生を真似る、いや見習えることがありました。それは食に関する旺盛な好奇心です。先生の思い出で筆頭に上がるのはもちろん授業風景ですが、それに勝るとも劣らないのが食に関する思い出です。先生は大阪外国語大学をご卒業後、コペンハーゲン大学文学部音声学研究所でご研究をされていたこともあり、デンマークでの暮らしのなかで北欧の料理もまたたく間にマスターされたのだと思います。北欧に美食を期待することはあまりないのですが、だからと言って美味しものが何もないわけではありません。どの国にも自慢の味はあるものです。デンマークはパン、とくにライ麦パンが美味しく、そのライ麦パンを薄くスライスしたものにバターを塗り、いろいろな具材をトッピングして食べる「オープンサンドイッチ」が郷土食として有名です。その具材のなかでもっともシンプルでごく日常的なものがレバーペーストなのです。レバーペーストはスーパーあるいは肉屋で売っているものを買うのがごく一般的なのですが、味にうるさい料理好きはこのレバーペーストを手作りします。

福居先生もその一人で、授業の中でよく「デンマークのレバーペーストは自分で作るとほんとに美味しい！スーパーで売っているのと全然違うよ」と仰っておられました。実際に先生のレバーペーストを味見させてもらったのは何年も後のこと、それがいつだったのか、今となってははっきりと思い出せません。おそらく2000年前後くらいだったのではないかと思います。先生ができたてホヤホヤのレバーペーストや他のご馳走を用意して、クリスマス会を受講生対象に開いて下さったときです。当時、私もようやく一教員としてデンマーク語や北欧文学を教える立場になっており、本来はクリスマス会に参加する資格はありませんでした。ただ先生ご自慢のレバーペーストを味わいたい一心で自分の部屋の電子レンジでレバーペーストを温めな直すお手伝いを申し出、そのお駄賃として、ついにシェフ福居のレバーペーストのおこぼれに与りました。滑らかでコクのあるレバーペーストを黒パンに塗って食べたときの美味しかったこと！ 学生時代、私は音声学の授業では劣等生でいつも肩身が狭かったのですが、このときばかりは「先生、このレバーペーストどうやって作るのですか？ 私もしはマスターしたいと思います」とレバーペースト調理法の指南をお願いしたのはっきりと憶えております。

このように私は福居先生に聴覚と味覚を鍛えてもらいました。聴覚の方では先生のご教育に報いることはなりませんでした。味覚はしっかりと鍛えられ、立派な食いしん坊に成長いたしました。このあいだ引き取っていただいたニワトコの苗木も先生の元で大きく成長させてやってください。そして数年後には芳醇な香りの花のジュースをまた味あわせてくださいね。楽しみにお待ちしております。

このたびのご退職、本当におめでとうございます。今後も御元気でますますご活躍されることを祈念しつつ拙い筆をおかせていただきます。